
サラリーマン勇者

SUPY

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

サラリーマン勇者

【Nコード】

N9185C

【作者名】

SUPY

【あらすじ】

サラリーマン田中は父親から35年間死んだと思っていた母が実は生きていると聞かされる。しかも母は魔法使いであるという。母に会いに旅に出る冒険ファンタジー

おやじは気難しい人であつた。

四角い面の真ん中にぴんと踏ん反り返つた髭が乗つていた。なんでも昔のなんとかという偉い坊さんと同じ髭なのだと祖母から聞いた。その坊主がどんなに偉かつたのかは知らないが全くもつて罪な髭を考えたものだ。余程の悟りを開かなければこんな成りで人前に出る事もできまい。

かと云つておやじが余程の悟りを開いているかと云うと子供目に見ても鼻屑目に見てもそんな境地とは無縁の人のように思う。

ただ髭の手入だけはしっかりとしているようで髭が毎日寸分違わぬのには少々参つた。そんな暇があるのなら剃刀で剃落とし、浮いた時間で将棋の勉強でもすればよからうと一度そう云つて殴られたことがあつた。その癖将棋仲間がやってくると嬉しそうに将棋を指す。

おやじは将棋が滅法弱い。弱い事は弱いが将棋を大変好み、高価なカシの四方碁を持っていた。脚のついたしつかりとした将棋盤で、暇があれば髭を弄るかその将棋盤を磨いている。

中学の頃におれが飛車角二枚を落としてやってそれでもおやじに勝つてしまったことがあつた。その時は一月程小遣いが貰えず閉口した。以降おやじとは将棋は指していない。

磨くべきは盤では無く己の腕の方であらう。

そんなおやじであるから将棋仲間がやってくるのは少々難儀なことである。

始めは喜々としているおやじであるが少しでも形勢不利と見るや途端に機嫌が悪くなる。そうして機嫌が悪くなると茶を持って来いと大声で喚く。その都度盆に湯飲を載せて持つて行くのだが、その度に出すのが遅いだのもっと早く持つて来いだのと小云が付く。

茶の催促の間隔が短ければそれだけおやじの形勢は不利になつて

いて催促が無ければ勝っている。しかしおやじは腕が悪いから何遍も台所と縁側を行来しなければならぬ。茶を運ぶこちらとしては堪ったものではない。

そうしてふうふう云いながら一口啜りぬるいぬるいと文句を付ける。また、薄過ぎて白湯かと思つた等とも云い出す。

入れたばかりの茶にぬるいも糞もあるものか。茶と白湯の区別もつかぬような舌では飲まれる茶が可哀想である。

そうして終いには何故茶を持つて来たおれは珈琲が飲みたいのだと云い出す。そんな事も気がつかんとはお前は本当に駄目な奴だと罵つた。全く以て云う事が無茶苦茶である。

極稀におやじが将棋に勝つ時もあるが、そんな時はおれを手招きして懷から財布を取り出して寿司を取れと云い、余つた分は小遣いにして良いと云う。

だからおやじにはもつと将棋に強くなつて欲しかつたがおやじはずつと弱かつた。

おやじがこんなだから毎日相手をするのは少々骨が折れる。愚痴のひとつもこぼしたくなる。子供は親を選べないから不幸だと云つたらおやじは親も子を選べないから不幸だ、選べたらもつと出来の良さそうなのにしたと云つてごろんと横になつて寝てしまった。

おれは何も好きでこつ育つたわけではないが、母がいればおれはもう少し素直に育つたかもしれぬ。

物心付いた時からおれには母がいなかった。小学校に上がる時分に酒に酔つたおやじから、母はおれを産んですぐに死んだと聞かされた。おれはその時何と返せば良いのか分からずに気まずくて黙つて下を向いて居た。おやじは寂しいかと云うからおれはそんな事はないと云つた。それきり母の話題は避ける様にしてきた。

おやじは母のものを全て処分したと見え、家には一枚も写真が無かつた。それ所か墓参りに行つた事も無いし仏壇も無い。だからおれはずつと母の顔を知らなかつたし、どこに眠っているのかも知らない。その事を祖母に云つたら、どこに隠して居たのかおやじと母

の並んだ写真を一度だけこっそり見せてくれた事があった。

母は色白の綺麗な人であった。

おれはおやじに似ているとよく云われるが、こうして見るとなるほど確かにおれはおやじ似だ。そう云うと祖母はいやお前は母親にもそっくりだと云う。おれは嬉しくなつてどこがそっくりかと聞いたら、ほれ目と耳と口鼻の数が同じだと笑っていた。これは祖母なりの氣遣いかも知れぬ。だがその時は他に小用もあつて写真を突き返したがこれは後で大変後悔した。

おやじは母の話をしたがらないが祖母の話では余り物云わぬ静かな人であつたらしい。そんな祖母も小学3年になつたときに死んだ。脳卒中だった。

遺品を整理する際に以前見た母の写真を探したが遺品の中には何処にもなかった。大方おやじが先に見つけて隠してしまつてしまつたのだらう。

それからはずっとおやじと二人で暮らした。おれは中学から高校までずっと柔道をやつていたから余り家に居る事は無かつたが、居間を覗くと大抵おやじがちゃぶ台の前に胡座をかいている。

たまにぶらりと出掛けることもあつたが顔を合わせても将棋の相手に誘われるのでおれは部屋に引込んでいた。

しかし食事の時はどうしても顔を突き合せる事になる。その時ばかりはおやじと居間に並んで飯を食うが大体喋る事なんて無いものだからさつさと食べた。おやじも同じ心持ちと見えて、さつさと食べて酒を飲んでいた。父親と息子なんて云うものはそんなものだらう。それにおれもおやじも頑固で意地っ張りであるからその方が幸いなのかもしれない。

そんな二人であるから、ひとつ屋根の下それも四六時中よく一緒にいたものだと思う。おやじはずっと家に居るが別段働いている様子は無かつた。

おれはおやじが仕事に出かけるのを一度も見た事がないし家で働いている所も見た事がない。朝学校の仕度をしている時おやじは寝巻

のまま大抵沢庵をぼりぼり食っているか将棋盤を磨いている。髭はだらしく垂れておやじの動きに合わせてゆらゆら揺れている。そして学校から帰るとおやじは居間に座ってやっぱり沢庵をぼりぼり食って居るか将棋盤を磨いている。何故か髭だけは生意気にもぴんとしている。おれが寝てから働いているのかとも思って夜中にこっそり壁に耳を当てると、やっぱり隣の部屋にからぐうぐうとおやじのいびきが聞こえた。

一度だけ仕事は何をしているのか問い質した事があったが、うん、まあと返事なのかなんだか良く分からない様な答えが返って来たので以来聞くのは辞めた。おれは家に帰ってまで机に向かうような性分ではないから、成績はいつも下から数えた方が早かった。

それでもそんな息子を心配するとか、勉強が出来ないからと説教する様な熱心なおやじではないから、というよりもおれがどう育とうが余り興味がないのかもしれない。なる様になるしなる様にしかならぬ位にしか思っていないかと思う。

ただ高校三年の夏に部活を終えて部屋でむしゃむしゃとかき氷を食っていたら、居間にいるおやじがちよつと来いと呼んだ。なんだろうと思っ行ってみるとおやじは新聞を読んでいた。おれはおやじから離れた座布団にどすんと座った。

「進学はするのか」

出し抜けにそう云うが、読んでいる新聞からは目を離さない。おれはなんだか腹が立っておやじの目玉が新聞からこっちに動くのを待った。人を呼び付けておいて新聞ごしに話しをするものがあるか。そっちが新聞を置かぬまでこっちからは絶対に動かぬぞとそう腹の中で決めた。

おやじはずっと黙って新聞を読んでいた。

おやじもおれも小便には何度か立ったが戻って来るとまたどすんと黙って座っていた。おやじは読み終えても何遍も何遍もぱらぱらとめくってみたり最初から読み直していたりした。おやじは意地でも新聞から目を離す気はないようだがおれもこっちから折れる気は更

々無かった。

しかしとうとう零時になり、おれは遂に折れた。おやじに呼ばれたのが17時を少し回った頃だから、かれこれ7時間二人で達磨の様に押し黙っていた勘定になる。

おれは夜が明けようともおやじが折れるまで待つつもりだったが、おやじはやっぱ夜が明けても読み終えた新聞とにらめっこしているだろう。おれが返事をしなければ一週間でも一年でも、それこそ穴が空くまでそうして新聞を読んでいそうだ。そのうちに新聞を持たなくなつたって一字一句覚えてしまいそうだ。そう思うと馬鹿らしくなつた。

「もう勉強はまっぴらごめんだ」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9185c/>

サラリーマン勇者

2010年10月15日23時14分発行